弘前市立博物館の完成にあたって

前　川　國　男

「弘前」という町は、私の母方の原籍地であります。

昭和３年３月に東大の工学部建築学科を卒業して、ただちに巴里に出発、コルビュジェのアトリエに入って２年間、伯父佐藤尚武の家に居候となっていた折に、弘前出身の通信関係の技術将校としてフランスに留学しておられた弘前出身の木村氏と相識ったことから昭和７、８年の頃、私の処女作として、在府町に木村産業研究所の設計を委任されることとなりました。爾来今日まで 40年余りの期間に女学校の講堂、市役所の庁舎、市民会館、市立病院、市役所増築、そして今回完成の博物館というふうに次から次へとお手伝いをする光栄をになう次第となったわけです。

未熟者の私にとって雪国の建築は却々むずかしい経験でありました。雪国の建築には「凍結」とか「菅もり」といったような常識的に昔から知られているトラブルの外に「水分の凝結」という厄介な問題があります。つまり冬期の気象条件の余りに厳しくない、たとえば関東以西の風土に建てられている建築とは比較にならない問題があり、したがって建築の単価もそれにつれて余分に高くなるべきものですが、逆に公共、民間を問わず、建築予算が関東のそれより低い場合が多いというのは大変おかしな話だと思います。兎に角こうして物心両面の重いハンディキャップをのり越えて建てられた公共建築物の維持管理の予算が却々充分でない点もおかしな話だと思います。これは寒冷地と限らずに日本全国の公共建築物にいえることでありますが、コンクリート造りの建築は「永久建築」と称して維持管理の予算がとりにくいというのはどうしたことでありましょうか。

私はモスコーへ行きました時に、彼地の役所の建築（これは帝制時代の貴族の建築とおもわれる建物を改装したものが多いようですが）の維持管理のよいのには驚きの目をみはらわされたことがしばしばありました。

話は大分横道にそれました。しかし博物館の意味は決して美術品の倉庫ではなく、結局「美」とか「芸術」とかいうものが何故に「人間」にとって必要なのかという問題に関して、深く市民の胸の中に問題提起をつづけなければならなに重大な使命を想起することによって、此の可愛らしい博物館を単なる美術品の「倉庫」として消極的な密室にされないように祈る次第であります。

（１９７５年9月）